

第2節 身の上相談記事から見た戦後日本の個人主義化

(太郎丸 博)

1 問題:近代化と個人主義化

社会変動論は、単にマクロな社会構造（例えば政治や経済）の変化を扱うだけでなく、それと同時に社会の中で生きる「人間」の変化をも分析の対象としてきた。とりわけ、近代化にともなう個人主義化、社会や人間関係との結びつきを失った孤立した個人の増加、そして、そのような個人主義化に起因する社会病理、といった議論は社会学の主要なモチーフの一つである。たとえば、フロムの『自由からの逃走』[5]、リースマンの『孤独な群集』[16]、ベラーの『心の習慣』[2]といった著作は、いわば近代化にともなう「病理」的な個人主義の発生とその社会的悪弊を論じた議論として社会学徒の間で有名である。このような社会の個人主義化は、人間が他の人間との絆を実際に失いつつあるということであると同時に、「自由で自律した個人」という人間観（人間を認識するための枠組み）の発達でもあった。たしかに人々が実際に孤立しているということと、人々が自分たちは孤立していると認識しているということは、理論的には区別できる。しかし、孤立とか孤独といった現象は、当事者たちが自分たち自身および自分たちの社会関係をどのように捉えているのかということと深く関わっている。本稿で関心があるのは、この人々を互いに孤立ないしは自律した存在として見なすような個人主義的人間観の広まりである。

一口に個人主義と言ってもさまざまなタイプがあり[11]、一概に論じることはできないけれども、本稿ではダニエル・ベルの以下のような記述で個人主義的人間観をとらえることにしよう。

現代的な意識においては、共通した存在なるものはなくなっている。あるのは自己のみである。この自己の関心事は、自己の個人的神聖性である。すなわち、社会的仕組みや慣習から解放され、偽善や仮面をつけることがなく、社会によって自己が歪められることを拒否する、変えることのできない独自の性格である。こういうことを求め続ける自己は、それゆえ、倫理的、美的判断の源として、行為よりも個人の動機を重視する。つまり、社会に与える道徳的な影響よりも、自分自身に与える影響を大切にす [1:pp.52-53]。

人間とは本来このようなものだという人間の見方が、本稿で言う個人主義的人間観である。ベル[1]によれば、このような個人主義的人間観[*1]は近代化が進行するにしたがって（特に第二次世界大戦以降）アメリカ合衆国において支配的になってきている。

このような人間観は他者を理解する場合だけでなく、自分自身の人生を理解する際にも適用できる。このような個人主義的人間観をベラーは「表現的個人主義者の類型」の「純粹にセラピー的形態」[2:p.57]と呼んで次のように概観している。

その[セラピー的な表現的個人主義にもとづく人生理解の][*2]中心にあるものは、自律的個人である。この場合の自律的個人とは、個人を超えた高次の真理にもとづいてではなく、個々人自らが判断する生活効率の基準にもとづいて、みずからの演ずべき役割となすべきコミットメントとを選択することができるかと想定された存在である [2:p.55]。

上のような個人主義的自己理解が社会成員の間への広まっていくことを本稿では個人主義化と呼ぶことにしよう。このような個人主義化は欧米だけでなく戦後日本社会においても進行してきたのだろうか。「私生活化(privatization)」が戦後進化したという議論[15]もあれば、西欧的な「自由で自律した個人」はいまだに日本にはほとんど存在しないという議論[8]もある。しかし、日本において個人主義的自己理解が人々の間で支配的になってきているかどうか、といった観点から議論した研究は、管見の範囲では見当たらない。いずれにせよ、戦後日本社会において個人主義化が本当に進化したのか、そして今後進行するのか、をさまざまな角度から検討してみることは、今日においても決して無駄なことではあるまい。以下では、身の上相談の内容の変化を通して、日本社会の個人主義化を個人主義的人間類型の浸透という側面から明らかにしていこう。身の上相談という資料を使って社会変動を調べるというのは、いささか特異な方法である。そこでまず、2節と3節で方法論上の諸問題を論じた上で、4節で資料の特性を概観し、5節で実際に分析を進めていくことにしよう。

2 身の上相談の研究

身の上相談を資料として用いることの長所と短所、そして身の上相談の内容をどう解釈するかについて、以下では先行研究を踏まえながら論じていこう。

(1) 資料としての身の上相談

人々の生きる世界や人間観を研究する際に、身の上相談が資料として役に立つことは以前から知られている。質問票を使った大規模な調査の場合、どうしてもプライバシーに立ち入ったことや詳しい生活の状況や心情・自己理解を知ることはなかなか難しい。それに対して、身の上相談のような印刷物の収集やフィールドワークは、人々の立ち入った問題に至るまで詳細に調べることができる可能性が比較的高い[13, 14]。

このような身の上相談使用の利点は、過去の世界や人間観について知りたい場合は特に大きくなる。現在のことならばフィールドワークで調べることができるが、過去のことはその時代の印刷物をはじめとした何らかのメディアを利用するしかないからだ。例えば、現在、日本に住む人々がどの程度個人主義的かを調べたいならば、日本中のいろいろな地域に行って何年でも徹底的にフィールドワークすることができるかもしれない。しかし、60年前の人々の人間観についてフィールドワークすることは、タイムマシンが開発されな

いかぎり不可能だ。もちろん村の古老に昔のことを聞くことは可能だけれども、それはあくまでも現在の視点から振り返った過去の世界・人間観のことであって、当時の世界・人間観そのものではない。村の古老の回想は参考資料としてはもちろん非常に大きな価値があるけれども、人間観の変化を調べたい場合は、あくまで参考資料の地位にとどまる[*3]。

このように考えてくると、過去の人々によって生きられた世界を調べるうえで身の上相談記事をはじめとした印刷物が貴重な資料となることがわかるだろう。

(2) 先行研究の方法論上の特徴

このような身の上相談を用いた研究は、すでいくつか存在する。例えば、マッキンストゥリーとマッキンストゥリーの『人生案内 大衆身上相談を通してみた日本』[12]という著書がある。これは、1987年に読売新聞紙上に掲載された「人生案内」欄を通して、日本の大衆文化をアメリカ合衆国の読者に紹介したものである。しかし、方法論的観点から特に興味深いのは、以下の二つの先行研究である。

日本の社会学者の間でもっとも有名な身の上相談研究は、見田宗介の「現代における不幸の諸類型」(文献[13]に所収)であろう。見田は、1962年の1年間の間に読売新聞の「人生案内」欄に掲載された304の相談の中にあらわれる「不幸」を詳細に分類・解釈している。彼はこの研究で当時若手の優れた社会学者におくられた城戸賞を受賞している。見田の方法論上の特徴は、質的データの価値を高く評価すると同時に、身の上相談を通して「現実」を知ることができる(少なくとも紙面では)信じて疑っていないという点である。

確かに見田は、身の上相談という「質的」データが「量的」データと同じように「客観」的であると言っているわけではない。身の上相談はすべての社会成員からランダムに選ばれた人々によって書かれているわけではない以上、「比率や分布などの数量的な結論」[13:p.4]は出せない。たとえば、大卒以上の高学歴者は身の上相談にはあまり投稿しないという説もある[12]。また、読売新聞紙面に掲載された相談者の属性を見ると、大半が女性、それも若い女性である。また編集者による投書の選別の影響も無視できない[*4]。したがって、普通統計的な分析で考えられるような代表性はえられない。身の上相談にあらわれるのは、日本社会の一部の人々の世界観・人間観が反映されていると考えるべきであろう。しかし、見田によれば質的データは量的データに勝るとも劣らない科学的価値がある。

活火山は決して地表の「平均的」なサンプルではない。しかし活火山から吹き出した溶岩を分析することを通じて、地殻の内部的な構造を理解するための有力な手掛かりがえられるのである。極端な、あるいはむしろ例外的な事例が、他の多くの平常的な事例を理解するためのいっそう有効な戦略データとなることは、自然科学においてさえ多く見られる。ここでは現代日本社会における「不幸の諸類型」のこのような戦略データとして、マスコミの身の上相談にあらわれる事例をえらんだ [13:p.3]。

見田の言う通り、「極端な、あるいはむしろ例外的な事例」を分析することはしばしば有効な手法だろう。しかし、身の上相談には脚色や創作が混じっている可能性が存在する。投

稿者が自分を美化したり、重要な事実を隠している可能性があるし、作家の卵が腕試しのために投稿した前例もある[*5]。このようなケースは(どの程度の割合で存在するのかはまったく不明だが)、事実の「極端な、あるいはむしろ例外的な事例」でさえない。ただし、このような危険は身の上相談研究に固有のものではない。「客観」的といわれる質問票調査でも、調査員によるメイキングや回答者による虚偽の回答の可能性は常に存在する。しかし虚偽が混じっている可能性があるからといって、その資料を全部捨ててしまうのは、潔癖すぎるというものだろう。

要するに、身の上相談を「信用できない」といって切り捨ててしまうのは行き過ぎた態度だけれども、だからといって身の上相談の内容がすべて「客観」的事実であるとナイーブに信じるのも(質問票調査の結果がすべて事実であると信じるのと同様に)誤りであろう。

身の上相談に対してもう少しさめたスタンスで取り組んだものとして、鶴見俊輔をはじめとした思想の科学研究会による身の上相談研究[18]がある。これは、明治時代から1950年代までのさまざまな出版物に掲載された身の上相談を収集、解釈し「男女交際」「家庭の危機」といった主題に分けて論じたものがある。この研究の特徴は、身の上相談を使って、思想史を書こうとしている点である。鶴見俊輔は身の上相談の中にはしばしば創作や歪曲・脚色が含まれていることを認めた上で次のように述べている。

だが、これらの事情[創作や歪曲・脚色が存在すること]を認めるとしても、これまでのように、身の上相談を特に低めてあつかう理由にはならない。プロフェッショナルの小説家の作品ならば、思想史的分析の資料として、重大であり、職業的作家以外の人々の作品ならば、思想史から排除してよいということにはなりたない[18:p.12]。

鶴見がここでいう思想とは、人々の生活から遊離した抽象的な観念ではない。「生活上の問題と取り組む民衆の日常思想史」[18:p.26]なのである。身の上相談の中に、「事実」を歪曲したものや創作が混じっていたとしても、そこには、人々の思想が反映されており、その人々の「思想」は十分に研究の対象となりうるというわけだ。このような「思想」は、人々の世界観や人間観を含んでおり、われわれの研究対象になると考えてかまわないだろう[*6]。

3 分析方法

(1) 数を数え上げることのメリット

上に挙げた2つの先行研究は、いずれもいわゆる「質的」な分析を行っている。つまり「典型」的と著者が考える事例が引用され、解釈される。しかし、ある事例が「典型」的であるかどうかは、常にあいまいである。例えば、「1934年に典型的なのは「妊娠」にまつわる悩みだが、1964年に典型的なのは、「中絶」にまつわる悩みである。」ということをご

うやって論証したらいいのだろうか。単にそれぞれの事例をいくつか引用して解釈するだけでは、論証の手続きとして不十分であろう。なぜなら、どうしてその事例がその時代において「典型」的であるといえるのか、その根拠・基準がハッキリしないからである。また、単に事例を引用するだけでは、研究者は、意識的ないしは無意識のうちに、自分に都合の悪い事例を無視してしまう危険を排除するのが困難である。

このような問題に対処するために必要なのが、コーディングと数を数え上げるという作業である。上の例で言えば、1934年には、「妊娠」に言及する相談がいくつかあったのに、1964年には、それがほとんどなくなった。逆に、1934年には「中絶」に関する言及がほとんどなかったのに、1964年にはいくつかの相談で言及されるようになったとすれば（実際そのような事態が読売新聞紙上で起こっているのだが）、「妊娠」や「中絶」に対する人々の考え方や知識が、変化したと解釈してもいいように思われる。

このような論証を行うためには、分析の対象となる身の上相談をすべて詳細に検討し、「妊娠」に言及している記事と言及していない記事、「中絶」に言及している記事と言及していない記事にそれぞれ分類し、その数・割合が1934年と1964年のあいだにどのように変化したのかを調べればよい。もしも読者がこのような2項対立的な分類に抵抗を覚えるならば、「妊娠」に言及している記事と言及していない記事、そしてそのどちらにも分類できない記事、の3つに分類してもよい。そのうえで、それぞれの数・割合の変化を調べてもよい。このような手続きをふむことで、曖昧さを減少させ、より建設的な議論をしていこうというのが本稿の方法論的な立場である[*7]。

(2) コンピュータ・コーディング[*8]

コーディングとは、事例を分類して離散変数を作ることである。本稿では、個々の記事に0または1のコードを与えていく。例えば、相談の内容の中に親子関係が何か関係していれば、1を与え、関係していなければ、0を与える、といった具合である。こうして個々の記事が親子関係に言及しているかどうかを示す変数が作れる。同じ要領で様々な相談の特徴を示す二値変数を作る。

このようなコーディングを行う際に、田中重人[21]のautocode.awkというプログラムを用いる[*9]。autocode.awkは佐藤裕[17]のautocodeをawkに移植したものだ。autocode.awkは、形態素解析や構文解析のような自然言語処理能力を全く持っていない。このプログラムは、テキストファイルに変換した個々の記事に関して、ある種の文字列（たとえば、親子関係に言及する文字列、「父」）が現れたら1、現れなければ0をコードする、といったごく単純なプログラムである。

このような単純なコーディングプログラムを機械的に適用しても、適切なコードを与られないのは明らかだ。何も指定しなければ「秩父に住む30歳の主婦です。」という文が出てきても、autocode.awkは「父」という文字列にヒットし、親子関係への言及を示すためにつくった変数に1を与えてしまう。もちろん、このようなミスコーディングを避ける

ために様々な指定をつけられるが、実際には、何回もコーディングを繰り返さなければ、研究者たちが適当と思うコードをすべての事例に与えることはできない。結局、コンピュータなど使わずに、研究者たちが直接コーディングした方が早くコーディングできる。

それにもかかわらず、我々の分析課題には、今のところ `autocode.awk` が最も適切であると思われる。なぜなら、コンピュータなど使わずに、研究者たちが直接コードを与えていった方が早くコーディングできるのは事実だが、人間がコーディングに際して完全に同じ基準を堅持し続けられる保証は存在しない。たとえ一人の研究者がすべての事例にコードを与えていったとしても、最初の事例をコーディングしていたときの基準と、最後の事例をコーディングするときの基準が、同じであると言えるだろうか。このような問題は、コンピュータを使えば、簡単に解決できる[17, 23]。コンピュータには、同じ基準しか適用できない。

また、分析者は、知らず知らずのうちにデータを自分の世界観 / 理論 / 仮説 / 利害関係に都合のいいように、歪曲してコーディングしてしまうかもしれない。もちろんコンピュータには、このような歪曲を批判する力はない。しかし、`autocode.awk` を使えば、コーディングの基準はコーディング・ルール・ファイルという目に見える形で残る。そうすれば、研究者自身がコーディングの基準を反省するのが容易になるのはもちろんのこと、他の研究者が、そのコーディングの基準を批判し、改善する手がかりとなる[*10]。

また、分析の途中でコーディングの不備が見つかり、コーディングの基準を変更したいときも、`autocode.awk` を使えば、ちょっとしたコーディング・ルール・ファイルの修正で済む[17, 23]。コンピュータを使わなければ一からコーディングのやり直しとなり、多くの労力を必要とする。我々の研究のように先行研究が乏しく、探索的な過程がかなり必要となる場合、コンピュータを用いたほうが結局は早道である。「急がばまわれ」ということだ。

たとえコンピュータでコーディングすることが適切であるとしても、なぜ自然言語処理能力を持つもっと高度なプログラムを用いないのか？ 一つには、手軽に使える適当なプログラムがまだ存在しないからだ。職業コーディングのような比較的目的もコーディングの基準も定まったコーディングにおいてすら、まだコンピュータを使った自然言語処理は完全には実用段階に達していない[*11]。いわんや身の上相談をや。

また、コーディングのルールが明確に定まっていない場合、コーディングをコンピュータに任せきりにはできない、とも言える。`autocode.awk` 自身は全く文章を解釈しないからこそ、研究者の解釈をコーディングに完全に反映させることができるのであり、そのようなプログラムこそ、この研究にはふさわしいと思われる。

4 データの特質

(1) サンプリング

1934年、1964年、1994年の3時点の読売新聞（関西版）から、それぞれ、約100強、合計300強の身の上相談記事を系統抽出した。サンプリングの詳細をまとめたのが表1である。読売新聞を選んだのは、同紙がかなり広範な人々に読まれており、長期にわたって継続的に身の上相談を掲載している印刷物だからである。

1934年には婦人欄の中に「悩める女性へ」という題で身の上相談が掲載されており、相談者はすべて女性、回答者は川崎ナツ氏一人であった。この欄は戦時統制のために1942年にいったん紙面から消えるが、1949年から「人生案内」という現在の名前で男女を対象として再びあらわれる。1964年、1994年においては、回答者は男女をあわせた複数の知識人（たとえば作家、大学教授、弁護士、カウンセラー）が引き受けている。

表1を見ると、時点によって事例の数が一致しない。これは、まれに身の上相談が掲載されない日や新聞そのものが休刊の場合があるからだ。

サンプリングは以下のような方針で行った。

時代の特徴がある程度詳しく分かるように、各時点ごとにある程度まとまった数の事例を集める。

長期間の変化の趨勢を見るために、戦前から現代にわたる事例を集める。

しかし数が多すぎるとコーディングと解釈が事実上困難になっていくので、事例の数は絞る。

結果的に、表1のようなサンプリングをすることになった。

表1 身の上相談のサンプリング

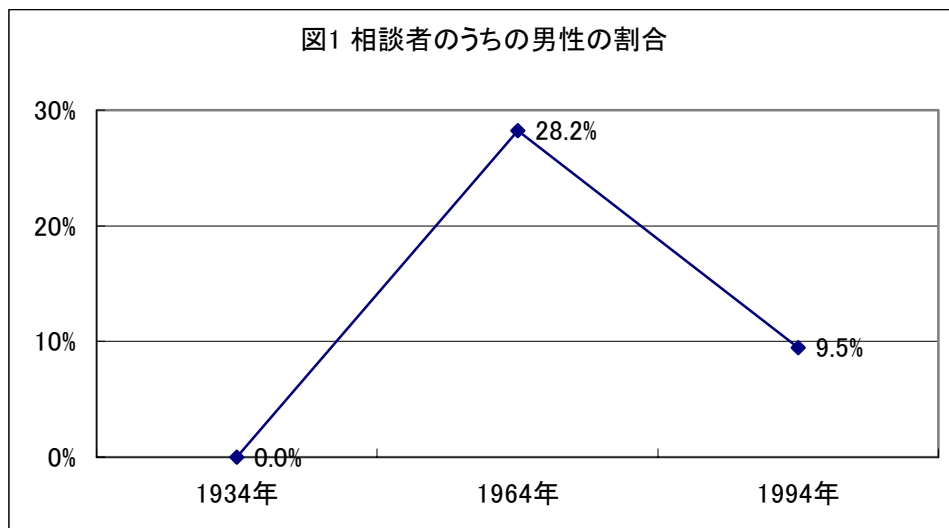
	1934年	1964年	1994年
記事の名前	悩める女性へ	人生案内	
相談者の性別	女性のみ	男女とも	
抽出間隔	1日おき	2日おき	
有効な事例の数	110	117	116

これらの身の上相談記事は、表題、相談内容、相談者の性別・居住地、回答者の名前（と1994年に関しては回答者の肩書き）、回答内容から構成される。この一つの記事全体を1事例とし、分析の単位とする。ただし、本稿では、相談者の相談内容だけをデータとして用い、回答者の回答内容はコーディングの対象にはしていない。回答内容も相談内容と同じように貴重な資料だけれども、個人主義的人間観がどの程度人々の間で広まってきているのか、という本稿の研究課題にはいささかそぐわないと判断したからである。以下では3回、相談に対する回答を引用しているが、これは、身の上相談のイメージを読者に持ってもらうためであると同時に、相談の内容の理解を助けるためのものである。

(2) 相談者の性別と年齢

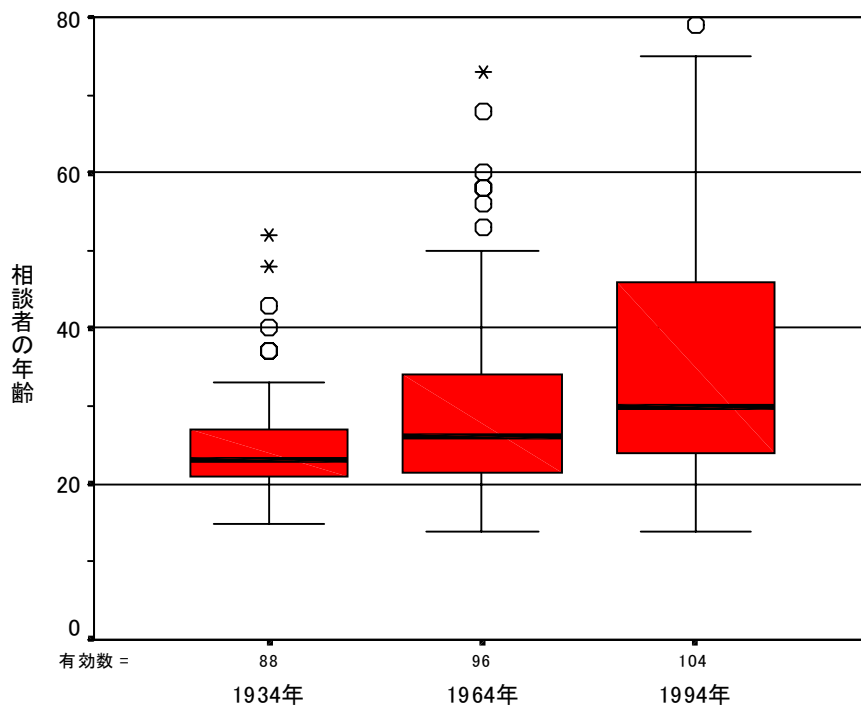
相談の内容を検討する前に、相談者の性別と年齢の分布を簡単に見ておこう。相談者の中で男性が占める割合を時点別に示したのが、図1である。1934年は女性のみを対象にしていたので、当然男性は0パーセントである。1964年では、3割弱が男性であるけれども、1994年になると1割弱まで落ち込んでいる。なぜこのような変化が起きているのかは興味深い問題だけれども、ここでは、相談者は主に女性であるということを確認しておけばい

いだろう。



次に相談者の年齢を見てみよう。時点別の相談者の年齢を箱ひげ図にして示したのが、図 2 である。図中の四角い部分の横幅には意味はない。箱の底辺の位置が年齢の第 1 四分位点を、上の辺が第 3 四分位点をしめす。たとえば、1934 年の場合、箱の高さは、21 歳から 27 歳にわたっているので、1934 年の場合、真ん中の 50 パーセントの人は 21～27 歳であるということになる。他の時点も同様に考えればよい。箱ひげ図の箱の上下には線が延びている。これが「ひげ」なのだが、“ ” と “ * ” で示した外れ値[*12]以外の人はこの年齢の範囲に入ることを示している。例えば 1934 年の場合、ほとんどの人が 10 台の後半から 30 台の前半の年齢であることが分かる。このように箱ひげ図を見ると、最近になるにしたがって、相談者の年齢層が幅広くなっていっているのが分かる。これはおそらく戦前に身の上相談が一部の若い人々の間に定着し、その人たちが年をとっても投稿するからではないかと考えられるが、いずれにせよ、年齢層が広がってきていることは念頭においておこう。

図 2 時点別の相談者の年齢分布を示す箱ひげ図



5 分析

まず、イメージしやすくするために、身の上相談の1例を挙げてみよう。

以下に挙げる身の上相談は、1934年の3月24日に「恋人の胤を宿して今更慚愧する人妻」と題して掲載された相談である。ただし旧仮名遣いはすべて新仮名遣いに、旧字体の漢字は適宜新字体に直してある。

二十九歳になる四人の子の母でございます。私は早婚でした為、恋などということも知らずに参りましたが、一昨年春或る青年と知合いになってからどうした事かその青年が忘れられなくなってしまいました。そして異性を知らない彼もいつしか私を慕うようになりました。併し私には夫も子供もありますし、年齢も違いますので決して恋愛じみたことを話したことなく悩ましい一年を過ごして昨年春になりました。そして私共もまた人の恋と同じように恋を楽しむ二人となってしまう、彼は私の肉体を求めるようになりました。やがて秋が来て私共は家庭の都合上遠く離れなければなりません。或夜別れの言葉を交わしつつ名残を惜しまましたが遂に今まで拒み通したものを許してしまいました。しかも、たった一度で彼の子を宿したと知った時、私の驚きはどんなでありましたろう、今は文通もせず彼を忘れず全てを忘れてせめて夫や子供に尽くしてと心がけて居りますが、一度作った罪はいつになったら償われるものでありましよう、日夜悩んで居ります。夫は別に私を疑っては居りませんが、そうしたことが私にとっては罪深く思われてなりません、そうかといいて今更打ち明けることも考えさせられます。相手の青年は私の妊娠した事を知って居ります、今の場合どんな処置をとったらよいでしょうか(罪の女)

これに対する川崎ナツ氏の回答は以下の通りである。

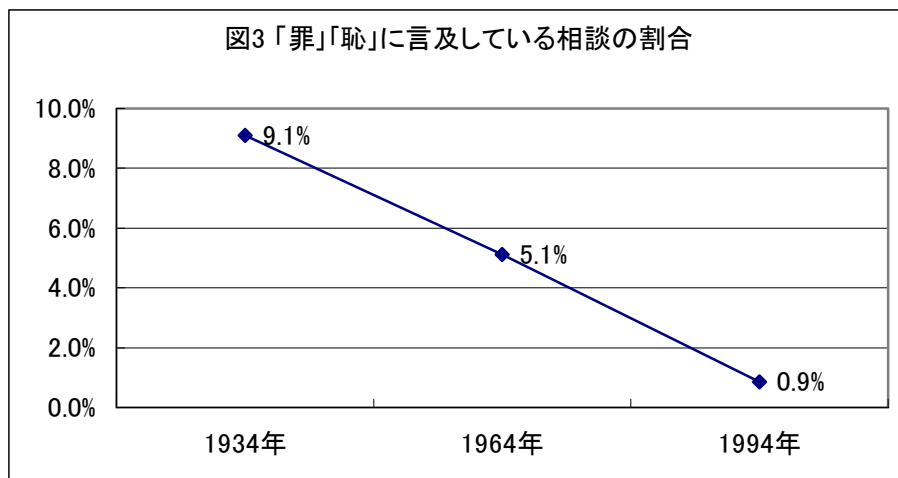
幸いいまは相手の青年は家の事情で遠く離れゆき、夫はあなたを信じ切り、あなたも夫を愛してもゆけるというのであってみれば、あなた方の恋愛も終結すべき好機なのです。再び夫の心にかえり、四人の子供の母心を取り戻しなさい。一時は心迷われても、かえるべき所にかえられるならば、そこには「救い」があります。そして迷わなかった前よりも一層はつきり夫や子供を知り、そこに妻として母としての自分というものを知り得て、却って自分を深くしたことになるかも知れません、そしてよしや一度は犯した罪も立派につぐなわれ救われる筈であります。

従って近く生まれようとする子供については、必ずしも、いま、何も知らずに居る夫にすべてを告げねばならぬことはありません。夫へのこれからのあなたの心が絶えず流れ注がれている中に話し出すよき緒口もあるでしょう、その時でも宜しい、或いはまたその時が来なかったら必ずしも告げなくとも、これからのあなたの誠ある言動は、一片のざんげを十分つぐないます。四人の幼き子供さんのために夫のために、あなたのよき更正をのぞみます。

回答の方も興味深いが、議論を相談の方に限定しよう。話がおもしろすぎるので、相談内容が事実かどうか疑いたくなるかもしれないが、事実であろうとなかろうと、次の2点が注目に値する。

(1) 「罪」「恥」への言及

第一に、「罪」といった抽象的概念を用いていることが注目される。単に困っているというだけでなく、何らかの一般的規範から逸脱しているという見方が示されている。つまりこれは、本稿で個人主義的人間観と呼んでいるものとは対極にある人間観である。「個人を超えた高次の真理にもとづいてではなく、個々人自らが判断する生活効率の基準」にもとづいてさまざまな判断を行うのが個人主義者のはずであった。しかし上の相談者「罪の女」は、「個人を超えた高次の真理」(この場合は規範)に照らして自分自身を捉えているのである。このように人間を社会との関係でとらえる人間観は、いわば社会学的人間観とも言うべきものである。



このような「個人を超えた高次の真理」に照らして人間をとらえる相談は、全体としてみても少ないのだけれども、特に最近になるにしたがって、減ってきている。今回用いた資料の中で「個人を超えた高次の真理」に訴えていることが分かるキーワードとして、「罪」または「恥」という言葉をえらんだ。たしかに「罪」と「恥」では、その倫理的性質は大きく異なるといわれている[3]。しかし「罪」と「恥」は、いずれも単なる「個々人自らが判断する生活効率の基準」に準拠しているのではなく、それ以上の何らかの原理に基づいているという点では共通した性質を持っていると考えていいだろう。この「罪」または「恥」という概念を使っている相談の比率を示したのが、図3である。図3を見ると、身の上相談の中では「個人を超えた高次の真理」に照らして人間とその状況が捉えられることがますます少なくなり、「個々人自らが判断する生活効率の基準」に照らして単に「困っている」、「迷っている」というように状況が捉えられるようになってきていることが分かる。例えば、1964年10月18日の記事「何も知らない結婚相手勤め先の主人と不潔な関係」を見てみよう。

二十六歳の女、まもなくA(二八)と結婚する予定です。Aとは長い付き合いで変わらぬ愛情で包んでくれますが、わたしのほうもAに「死ね」といわれればすなおにいうことをきけるだけの愛情をもっています。そんなAをもちながら、勤め先の主人B(四八)と深い関係になりました。一年ほど前からですが月に二、三度の関係をつづけ、Aとちがった包容力をもつBも愛しています。Bとは毎日会社で顔を合わせますが、冷たくされると寂しく、そのくせ心の底ではBを憎んでいます。Bの甘い言葉にまどわされ、給料ほしさもあって不潔な関係をつづけていますが、悪夢からぬけだすためには会社をやめるほからはなさそうです。BはAとのことを知りながら「結婚後もこのままでいよう」といいます。Bはいままで女三、四人を転々としていますが、どの女にもとても親切です。Aは「結婚後は会社をやめてもいい」といいますが、共かせぎでないと食べていけません。何も知らないAのためにも、うまくBからのがれる方法はないのでしょうか。Bの甘い言葉をはねつける勇気をもって、Aにすべての愛情を捧げたいのですが、仕事を失うのは生活上困ります(福岡県K代)。

三角関係に悩む女性という主題は最初の相談と同様だが、この相談の中には、「罪」「恥」といった抽象的な問題はない。「悪夢」という隠喩が目を引き、これも自分の困った状況を述べるための修辞法に過ぎない。問題なのは、生活の糧を失わずに「うまくBからのがれる方法」であって、「社会に与える道徳的な影響」ではない。そこにあるのは、社会学的人間観ではなく個人主義的人間観であると言っていいだろう。

この相談に対する白川渥氏の回答は、すこぶる保守的な倫理の色彩を帯びていながら、修辞的には「個人を超えた高次の真理」との関係ではなく「個々人自らが判断する生活効率の基準」との関係で助言を与えるものだ。

あなたの生き方はまるででたらめ、というほかありません。間もなく結婚する相手をもちながら、しかもその人を死ぬほど愛しているといいながら、Bとの不潔な生活をつづけているとは、何ともあきれた話です。

短い文面からも、Bがいかに愚劣な男であるか、その正体をはっきりと読みとれます。ただあなたのからだをもてあそんでいるだけのケモノにすぎません。それがわかまえられ

ないあなたでもないでしょう。

いうまでもなく、一日も早くいまの愚かな生活からの脱出を決断すべきです。共かせぎを必要とするなら、職場をかわればいいではありませんか。その気になれば、いまはいくらでも新しい働き口が見つかるはずです。Bとは一日も早く、きっぱりと別れること、女を転々としているような男なら、あとくされの心配など無用だと思います。

職場より何よりも、あなたの生き方を転換することが先決です。Bに冷たくされると寂しいような、たよりないというような、いまのあなたの心の持ち方では、たとえ結婚しても、またあなたの将来があやぶまれるでしょう。

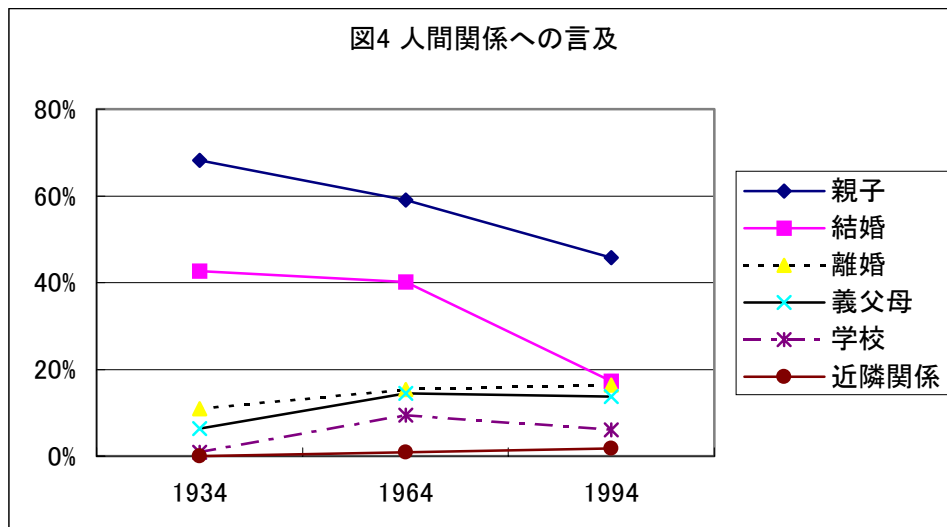
「あなたの生き方はまるででたらめ」「何ともあきれた話」といった言葉は、道徳的基準に照らした批判の言葉だが、それほどはっきりしたものではない。むしろ「あとくされの心配など無用」「あなたの将来があやぶまれる」という具合に、個人主義的な人間観にのっとるかたちで保守的な倫理が語られている点が注目される。

(2) 人間関係への言及

最初の「罪の女」の相談に関して注目すべき第二の点は、人間関係への言及である。人間は社会的真空状態に存在しないかぎり、自分の相談すべき困った状況を語るためには、何らかの人間関係へ言及しなければならない。「或る青年」「夫」「子供」といった人々が相談の中で言及されている。このような人間関係が自分のおかれている状況を構成していると捉えられているのである。このような自己理解は、個人主義的人間観、すなわち「社会的仕組みや慣習から解放され、偽善や仮面をつけることがなく、社会によって自己が歪められることを拒否する、変えることのできない独自の性格」とは程遠い。むしろ人間は「社会的仕組みや慣習」の中に深く埋め込まれた存在であると捉えられている。先に述べた社会学的人間観がやはりそこにはあらわれている。

ところが、このような社会学的人間観が多少なりとも見られる相談は、最近になるにしたがって減少してきている。図4は、何らかの人間関係(親子、結婚、離婚、義父母、学校、近隣関係)に言及している相談の割合を時点別に示したものである。凡例に挙げている「結婚」と「離婚」は、配偶者(ないしは配偶者候補)との関係が問題になっている相談を示す指標として用いている。これは、結婚していることがはっきりしていて配偶者にまったく言及しない相談は存在しないので、「配偶者」への言及の頻度を調べてもあまり意味がないからである[*13]。

図4を見ると親子関係と結婚に対する言及が激減していることが分かる。離婚、義父母、近隣関係といった事柄へ言及する割合はわずかに上昇しているが、全体としてみれば、人間関係への言及が減ってきているといいだろう。もちろん、ここでは挙げていないさまざまな人間関係への言及があるので、安易に結論づけることはできないが、少なくとも、親子、夫婦といったこれまで一次的人間関係と呼ばれてきたような関係が次第に重視されなくなってきたということである。



たとえば、1994年11月28日に「舞台の夢あきらめ後悔。無気力なフリーターに」と題して掲載された相談には個人主義的人間観が典型的にあらわれている。

二十七歳の女性。幼いころから舞台に立つのが夢でした。
 短大在学中にプロの劇団を受験しようと考えました。が、向いていない気がして断念。
 卒業後、電機メーカーに就職しました。仕事は順調でしたが、二年ほど前、人間関係で悩み、体調も悪くなり、辞めてしまいました。以来、ずっとフリーターです。
 今になって舞台などで活躍している人を見るたびに、幼いころの夢をどこまでも追いかけていればよかったのかと悔やまれます。
 最近は何にも興味が持てず、無気力です（兵庫県・A子）。

もちろん、A子も何らかの社会関係の中で悩んでいるのだろうが、それは問題とされない。「社会的仕組みや慣習から解放され、偽善や仮面をつけることがなく、社会によって自己が歪められることを拒否する、変えることのできない独自の性格」の持ち主として自己は理解される。

1994年12月10日の「ダイエットに失敗。ストレスで無気力に」は、本来自分の内面にあるはずの神聖で独自の自己さえ見失ってしまった例である。

二十二歳。八月に間違ったダイエットをして拒食症、過食症、うつ病になりました。生理が止まり、十二指腸かいようにまできました。
 かいようは完治しましたが、生理はまだなく、婦人科に通っています。精神科にも行き、薬をもらって飲みましたが、効果があるように思えず、今は飲んでいません。
 何事に関しても気力がなく、趣味もなく、熱中できることがありません。頭の中はダイエットのことばかりで、今度は正しくダイエットしたいという気持ちがとても強くあります。が、婦人科の先生に止められ、それもできず、かえってストレスで食べてしまいます。
 目標を持ち、毎日幸せに暮らすために、私はどう行動し、努力すればよいのでしょうか（大阪府・K子）。

これに対して河野貴代美（心理カウンセラー）は、以下のように答えている。

大変ですね。さぞかし困惑の毎日を過ごされていることでしょう。とはいっても、あなたの要求にぴったりの回答をさしあげられません。

「目標を持ち、毎日幸せに暮らすために、どう行動するか」がわからないために「病気」になっておられるのです。この二つが関連していることをご理解下さい。「病気」はいつみれば、あなたのご自分を見失っていることの表現（症状）なのです。

では、どうすれば自分を取り戻せるのか。カウンセリングを受けて下さい、と申し上げるしかありません。ていねいにゆっくりご自分に向き合って、何が自分の目標かを自分の中に発見していくことが必要です。

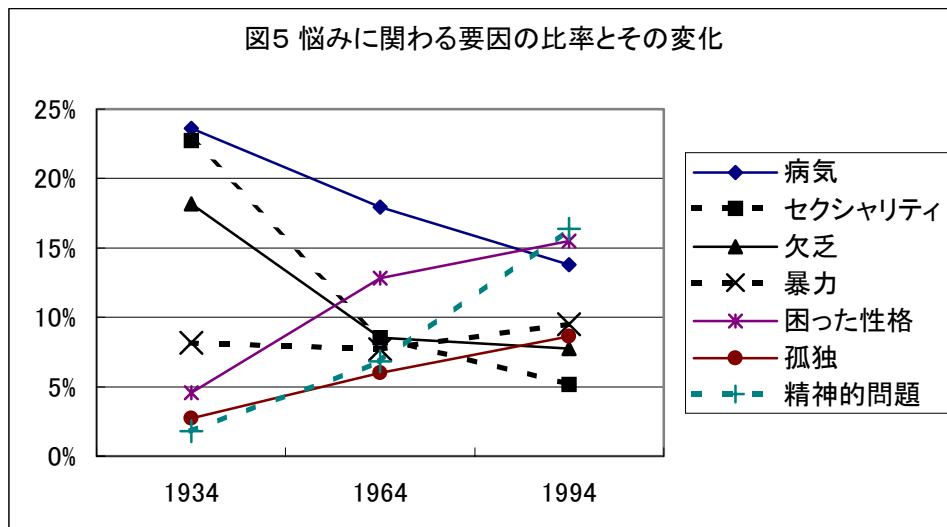
つらいから、他者に自分はどうすればいいかを尋ねられることもあるでしょう。他者の答えはいろいろです。それによって、さらに混乱する場合があります。

答えやアドバイスは他人（カウンセラーのような専門家も含めて）が持っているのではなく、あなたの中にしかありません。

答えは、「自分の中」に「発見していく」しかない。このようなセラピー的人間観が現代の個人主義的人間観をもっとも端的にあらわしているといっていだらう[*14]。

(3) 個人主義的テーマの増加

最後にもう一つ、個人主義化の兆候を見ておこう。一つの指標として相談に関連して現れるさまざまな主題への言及の頻度の変化を調べてみた。その結果が図 5 である。これらの主題が必ずしも相談の主要なテーマとは限らないけれども、何らかのかたちで、それらの事柄に言及しているかどうかを調べている。病気、セクシャリティ（性的な嗜好や性関係への言及）、欠乏（貧困）に関する言及は減少している。暴力に関してはほぼ横ばいである。これらの減少ないしは横ばいの主題は、必ずしも個人主義的人間観を反映するものではない。これに対して最近になるにしたがって増えているのが、孤独、困った性格、精神的問題といった主題への言及である。「精神的問題」とは、「赤面症」や「うつ病」のような事柄への言及と、「大恐慌がくる」と言って子供を作りたがらない夫のことや「対人関係は下手」で困っているというように、性格ないしは精神にまつわる何らかの問題への言及のことを示している。「困った性格」とは、「頑固」「無責任」「子供っぽい」「ひねくれている」のように人を困らせるような性格にたいする言及である。これらはいずれもこれまで論じてきた個人主義的人間観を反映する状況のとらえ方である。このような主題への言及が増えていることは、個人主義化の進行を示唆するものである。



6 まとめと残された課題

本稿では、身の上相談の内容を分析した結果、戦後日本社会において個人主義化の趨勢が確認された。「個人を超えた高次の真理」への言及が減少し、「個々人自らが判断する生活効率の基準」がますます支配的になってきている。また、一次的な人間関係への言及も減少している。相談にあらわれる主題も、個人主義的な人間観を反映するような主題が増加し、その他の主題は減少の傾向にある。

このように個々の事例をただ漠然と解釈しているだけでは、明確には分からないような趨勢が、コーディングをして計量的に分析することで明らかにできた。既に述べたように、本稿で用いた資料は日本社会全体を正確に代表するものではない以上、今後さまざまな角度から更に検討が進められる必要があるだろう。また、すでに論じたように分析結果はコーディングの基準によって大きく変わってくる。今後、更なる研究が積み重ねられることによって、もっと妥当性のあるコーディングと分析を行っていくことが必要である。しかし、近代化にともなう個人主義化の進行という趨勢は、本稿だけが主張しているものではなく、1節で述べたようなさまざまな研究によっても支持されていることを考えれば、軽く見ることもできないように思える。

これまで、さまざまな論者が、さまざま観点から日本の個人主義化について論じてきたが、少なくとも身の上相談上にあられた人間観という点から見れば、個人主義化が進行しているということが分かった。しかもこれはいわゆる私生活化とも異なる現象である。なぜなら、私生活化は、親密な他者との人間関係を重視するものであるはずなのに、親子や配偶者をはじめとした親密な他者への言及は決して増えていないからである。このように考えると、戦後日本で進行している個人主義化は、単なる私生活化にとどまらず、社会の近代化にともなう、もっとラディカルな側面をあらわしているように思える。本稿では

人間観に問題を絞ったので、他の諸制度の変化との関係については論じられなかったけれども、日本と日本をとりまく世界の変化の中にもう一度個人主義化を位置付け直す作業が必要だろう。

参考文献

- [1] ダニエル・ベル(林雄二郎訳)1976, 1976, 1977. 『資本主義の文化的矛盾(上)(中)(下)』講談社学術文庫.
- [2] ロバート・N・ベラー、R. マドセン、W・M・サリヴァン、A・スウィドラー、S・M・ティプトン(島菌進・中村圭志訳)1991 『心の習慣 アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房.
- [3] ルース・ベネディクト(長谷川松治訳)1972 『定訳 菊と刀 日本文化の型』社会思想社
- [4] Berger, P. L. and H. Kellner. 1964. "Marriage and the Construction of Reality." *Diogenes* 46: 1-24.
- [5] エーリッヒ・フロム(日高六郎訳)1951. 『自由からの逃走』東京創元社.
- [6] 原純輔. 1988. 「非定型データの処理・分析」海野道郎・原純輔・和田修一(編)『数理社会学の展開』数理社会学研究会. pp.461-471.
- [7] 川端亮. 1997. 「パソコンによるテキストデータの内容分析」『ソシオロジ』 42(1): 97-103.
- [8] 川島武宜. 1967. 『日本人の法意識』岩波新書.
- [9] Kelle, U.(Ed). 1995. *Computer-Aided Qualitative Data Analysis: Theory, Methods and Practice*. Sage Publications.
- [10] クラウス・クリッペンドルフ(三上俊治・椎野信雄・橋元良明訳)1989 『メッセージ分析の技法 「内容分析」への招待』勁草書房.
- [11] スティーブン・ルークス(田中治男訳 1987)「個人主義の諸類型」『個人主義と自由主義』平凡社, pp.8-58.
- [12] Mckinstry, J. A. and A. N. Mckinstry 1991. *JINSEI ANNAI "Life's Guide": Glimpses of Japan through a Popular Advice Column*. Armonk, M. E. Sharp.
- [13] 見田宗介. 1965 『現代日本の精神構造』弘文堂.
- [14] 見田宗介. 1979 『現代社会の社会意識』弘文堂.
- [15] 宮島喬. 1983 『現代社会意識論』日本評論社.
- [16] デビッド・リースマン(加藤秀俊訳)1964 『孤独な群衆』みすず書房.
- [17] 佐藤裕. 1993 「部落問題に関する表現の構造 人権意識調査の自由回答項目の計量分析」『解放社会学研究』 7: 63-86.
- [18] 思想の科学研究会(編)1956 『身上相談』河出新書.
- [19] SPSS_Inc. 1997. *SPSS Base 7.5 Syntax Reference Guide*. SPSS Inc.
- [20] 高橋和子. 1998 「自然言語処理によるSSM 職業コーディング自動化システム」都築一治(編)『職業評価の構造と職業威信スコア』1995年SSM調査研究会. pp.195-228.
- [21] 田中重人・太郎丸博. 1996 「文章データのコンピュータコーディング: プログラムとその応用」『第22回数理社会学学会大会研究報告要旨集』 pp.20-23.
- [22] 太郎丸博・古川岳志・内海博文. 1997 「身の上相談の計量分析: 近代に本社会における「不幸」の諸類型試論」『日本行動計量学会第25回大会発表論文抄録集』 pp. 168-171.
- [23] 都築一治. 1992 「職業コーディング自動化システムの試験的構築」平成3年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書(研究代表者 原純輔)『非定型データの処理・分析法に関する基礎的研究』 pp.205-214.

注

- [*1]ベル[1]は「個人主義的人間観」という言い方はしていない。むしろニヒリズムないしは文化における近代主義という文脈で論じている。
- [*2]引用文の中の[]内は太郎丸による補足。以下の引用内の[]についても同様。
- [*3]過去の世界がどのように再構成されるかは、もちろん一つの研究課題となりうる[4]。しかし本稿の関心はそこにはない。
- [*4]マッキンストウリーら[12]は、「人生案内欄への投書は無作為に選ばれており、単に

短くしたり、漢字や文法の誤りを訂正するために編集が加えられるだけである」と述べている。1996年の12月に私が読売新聞社に問い合わせた際には、「特段基準があるわけではありませんが、純粋な法律、健康相談などは投稿規定で取り上げないとうたっていますので、そういうものは省き、同じような内容が続かないように配慮すること、また相談の意味が通じるものであれば、回答者に送りますが、回答者の段階でも「返答できない」として返却されるものがあります。」という回答をいただいた。また編集の方針としては、「紙面の行数が短いので、それに収まるようにするのが第一です。回答者の回答に触れてある事実を落とさないようにします。あとは表記を含めて意味が通じるようにすることです」とのことだった。

[*5]作家による創作の投書については、光華女子大学文学部の関肇先生にご教示いただいた。

[*6]身の上相談の理論的位置づけについては、太郎丸・古川・内海[22]も参照。

[*7]コーディングについては、[6, 9, 10]の文献も参照。

[*8]コンピュータ・コーディングの最近の趨勢については、川端[7]を参照。

[*9]autocode.awkは、1999年3月2日時点、以下のURLで入手することができる。佐藤裕氏によるオリジナルのautocodeの入手先にもリンクがはってあるので参照されたい。

<http://risya3.hus.osaka-u.ac.jp/shigeto/autocode/>

[*10]本稿で用いたコーディングルールファイルは、1999年3月2日時点では、公開していない。入手を希望される方は、taroh@koka.ac.jpまで、ご連絡下さい。お送りいたします。

[*11]職業コーディングの自動化の試みとしては、高橋[20]を参照。

[*12]外れ値の定義はSPSSのマニュアル[19]を参照。

[*13]もちろんこの他にもさまざまなタイプの人間関係がここで挙げたもののほかにも存在する。姉妹兄弟、職場での人間関係などさまざまな関係で人々は悩んでいるので、一概には結論できない。しかし、あまりにも雑多で統計を取れるほどの数が存在しないので、今回は除外している。

[*14]私は河野氏を批判しているのではない。おそらくあれが正しい助言なのだろう。彼女は、フェミニストカウンセラーとしてよく知られる人物で、女性のさまざまな悩みが家父長制をはじめとした社会制度との関係を抜きにして理解できないことをよく知っているはずである。それにもかかわらず、限られた紙面の中では、あのような個人主義的な回答しかできないというところに、現代の個人主義化を見るべきだろう。

謝辞

本稿の執筆のあたっては、関肇先生（光華女子大学）の助言が大変参考になった。また田中重人氏（大阪大学）は、autocode.awkを作成してくれただけでなく、彼との議論は私にとって大変有益であった。古川岳志・内海博文(大阪大学大学院)の両氏の協力無しでは文書データの入力の実現しなかった。中川輝彦氏(大阪大学大学院)は、ロバート・ベラーの著作に関して示唆を与えてくれた。以上の人々にこの場を借りて感謝の意を表します。もちろん本稿に何らかの誤りや問題があるとすればそれはすべて太郎丸の責任である。

附記

本研究は、平成10年度科学研究補助金（奨励研究A）の研究成果の一部である。